

第47回大会シンポジウム報告

地域の方々の協力を得て、毎年開催してきた。今年は、栃木県の現状を高橋氏と鈴木氏に紹介していただいた。

2. 話題提供

(1) 広汎性発達障害が疑われたてんかん児童の行動理解についてーてんかん治療の経過と母親面接を通してー(杉山 修)

一児童のてんかん治療の経過と母親面接を通して、てんかん児童の行動理解のあり方について報告した。

〈事例〉女児(7:9)、小学2年。中心・側頭部に棘波をもつ良性小児てんかん、発病は4歳11ヶ月で、てんかん発作は複雑部分発作(流涎を伴う舌のけいれんとしびれ感)、二次性全般化発作(口腔内の動きから右顔面、右半身のびくつき)、発作頻度は週単位であった。正常知能、広汎性発達障害があった。

初回入院時(6:1~6:5、幼稚園)では、複雑部分発作と二次性全般化発作が日単位でみられた。流涎がひどく、言葉が出にくかった。終始ボーッとしていて、人とのかかわりができにくかった。抗てんかん薬の調整後に両発作は著明に改善して指導課題はスムーズにこなすことができたが、視線の合いにくさや感情表出の乏しさがみられた。母親面接では、本事例が気持ちをうまく言えずにいたことや、母親が子育てでいらっしゃてしまうことが話された。3回目検査入院時(7:9、小2)では、入院前の抗てんかん薬の調整により発作症状は変わらなかったが、視線が合いやすくなり情緒的な交流は多少改善した。母親面接では、母親からの生育歴聴取をもとに、広汎性発達障害の可能性を説明した。

〈まとめ〉母親への治療経過に伴う行動理解と並行して発達的視点からの行動理解を促すことで、広汎性発達障害への正確な理解が可能となるものと考えられた。

(2) 学校におけるてんかんをもつ児童生徒(高橋 たつ子)

宇都宮大学教育学部附属特別支援学校では、現在10名(16%)がてんかんを併せもっている。最近は広汎性発達障害の児童生徒が突然発作を起こすケースが多くなってきている。校内での授業中の発作のほか、宿泊を伴う校外行事での発作への対応事例などを通じて、保護者、医師、教員の連携について発表した。特別支援学校での保護者は、困ったことやわからないことなどを保護者同士のかかわりの中でお互いに話して解決している様子がみられる。保護者間の関係を大切

にし、てんかんについて学校からの情報を保護者に適切に伝えて啓発することや、教師にもてんかん発作時の対応等を助言することなどが大切であると考える。

(3) てんかん協会栃木県支部の活動について(鈴木勇二)

栃木県支部は、1987年に設立された。2007年には、支部設立20周年を記念して理解啓発小冊子「やさしいてんかんハンドブック」を5,000部発行した。この小冊子は、会員や家族が中心となり、てんかんのある人の家族の経験、てんかんのある人々の生活、発作に遭遇したときの対応などをまとめたもので、一般の人々が手に取りやすいように「厚すぎず薄すぎず」を意識してまとめた。小冊子の作成や配布の過程で気づいたこと、講演会や電話相談などでの質問などから、周囲の人々のてんかんについての理解の現状について発表した。

3. 指定発言(長尾秀夫)

杉山氏のてんかんがある子どもの併存障害と薬物治療との関係、母親・家族支援のあり方について、高橋氏のてんかんがある児童生徒の特別支援学校における保護者・教職員の理解について、鈴木氏の「やさしいてんかんハンドブック」に関連しての体験談をうかがった後、自験例をもとにコメントし、参加者を交えて意見交換を行った。

自主シンポジウム4

聴覚情報処理障害(auditory processing disorders; APD)へのアプローチ4

—きこえの困難チェックリストの作成と音響心理検査に関する基礎研究—

企画者 原島 恒夫(筑波大学)

小渕 千絵(国際医療福祉大学)

司会者 弥永 美佳(大阪市教育センター)

話題提供者 小川 征利(岐阜県立岐阜聾学校)

八田 徳高(福岡県立直方聾学校)

小渕 千絵(国際医療福祉大学)

指定討論者 堅田 明義(中部学院大学)

原島 恒夫(筑波大学)

通常の聴力検査では聴力には問題がないが、「聞き返しが多い」「雑音のある環境では聞きにくい」「言わされたことを誤解しやすい」「見て学習することに比べ

第47回大会シンポジウム報告

て聞いて学習することは困難である」というように、日常的な聞き取りの問題を抱える者が存在する。これらのきこえの困難が聴覚モダリティに限定している場合は、聴覚情報処理障害 (auditory processing disorders; APD) とされるが、臨床的に遭遇する事例においては、発達障害に特徴的な注意集中、記憶、言語発達遅滞によるものが APD に比べむしろ多い可能性がある。本シンポジウムでは、きこえの困難チェックリストによるきこえの問題のスクリーニング、および音響心理検査による精査の基礎研究の現状について、除外診断のあり方も含めて討議を行った。

(1) 小川氏より、小学校通常学級を対象とした調査を通してきこえの困難チェックリストの妥当性などについて検討を行った結果について、話題提供があった。因子分析の結果 4 因子が得られ、それらを「注意」「記憶」「聴覚的識別」「低冗長性」とネーミングした。ここで、注意はおもに聴覚情報処理にかかわるもの想定しているが、語の認知過程にもかかわると考えられた。記憶についてはおもに聴覚的短期記憶を、聴覚的識別は聴覚情報処理過程を想定し、低冗長性については、騒音などによるマスキングや話者の発音が不明瞭など、音声情報が欠けていることにより生じる困難を想定し、これら 4 因子の関係をモデル図として提案した。

(2) 八田氏より、聴覚的時間情報処理の問題を検査するための適応型 GDT (Gap Detection Test) の作成方法、検査方法および適用結果について話題提供があった。この適応型 GDT は、非言語音検査であることにより、言語発達の影響を受けることなく低年齢の子どもに適用できる有効性があるほか、閾値が検査者の手法に左右されないものであった。また、子どもの遂行能力に合わせた適応型自動閾値測定プログラムによるものであった。また、この検査をきこえに問題をもつ子どもに適用した結果、PDD や ADHD が疑われる子どもには、弁別閾値の不安定さや試行回数の増加を示す者があった。また、きこえに困難のある子どもに GDT を適用した事例を報告し、チェックリストでは問題があったにもかかわらず GDT では正常範囲内であった者、弁別域値の上昇した者などさまざまな結果が得られ、症例を増やして再度検討するなど今後の検討事項が示された。

(3) 小渕氏より、両耳に同時に異なる検査音を提示する両耳分離聴検査について話題提供があった。この検査で測定しようとする側面は何か、またその中でみられる聴覚情報処理とはどのようなものかなど、検

査結果を解釈する上でこれらの点を理解することは、結果に基づいて対象児の支援方法を構築する上で重要なことが報告された。また、脳損傷例に対する両耳分離聴検査結果や、APD が疑われる小児から成人までの症例に対する結果をもとに、両耳分離聴下での神経心理学的メカニズムについて紹介された。以上のことから、症例の聞き取りの問題すなわち状態像への直接的な支援だけでなく、このような背景メカニズムを理解した上での支援が、根本的な問題の解決において必要と考えられた。

上記 3 名の話題提供に対し、藤本氏より、意味理解が困難であれば書きことばにも影響が出るのではないか、それは聴覚処理の困難さからくる結果として出ると考えられるのではないか、との指摘があった。さらに、白井氏より純粋モデルが明確でないとの指摘があり、また藤本氏より、「わたり音」の情報処理の問題が関係するのではないか、とのコメントがあった。指定討論者の堅田氏からは、小川氏のチェックリストの因子に関するカテゴリーについて再度検討が必要であること、原島からは、きこえのチェックリストや GDT からのみでは、状態像を確認することはできるが、原因の究明に至ることは困難であり、ADHD、PDD、言語発達遅滞などの除外診断の重要性と困難性が指摘された。

自主シンポジウム 5

絵本を媒介とした活動から 子どもの発達を問う —障がいのある子どもの支援としての 絵本利用の可能性 2—

企画者 石川由美子（聖学院大学）
司会者 京林由季子（岡山県立大学）
話題提供者 真鍋 健（広島大学）
 毛利 梢（栃木県那須特別支援学校）
 京林由季子（岡山県立大学）
 石川由美子（聖学院大学）
 若井広太郎（筑波大学附属大塚特別支援学校）
指定討論者 東原 文子（筑波大学）

本シンポジウムは、日本特殊教育学会第 46 回大会自主シンポジウム 42 (2008) での報告を引き継ぐ形で行われた。大人と子どもという非対称的関係の間で絵